

劉永言先生と一指禪氣功点穴療法

日本無為氣功養生会指導委員長
東京大学文学博士（アジア文化）

廖 赤 陽

1. 劉永言先生について

中国の氣功は、その応用価値から言えば、主に養生氣功および医療氣功という二大分野に分けられる。前者は、自分自身の練習を通してエネルギーを高め、心身のバランスを取り戻す方法であり、日本では、内氣功の名として広く知らされている。これに対し、後者は、外氣功とも呼ばれている。これは、外氣で患者を癒す方法であり、内氣功のさらなる発展段階とも見られる[注]。現在、中国の数多くの氣功流派の中から、『中国医学百科全書』（上海科学技術出版社、1988年）などの権威ある出版物に医療氣功の代表として取り上げられたのは、劉永言先生とその一指禪氣功である。

劉先生は、1931年、中国復建省廈門市に生まれ、先祖代々医者の家柄の6代目であった。氏は、もと廈門市中華衛生病院の院長（現在は名誉院長）で、現在、中国氣功科学研究学会名誉理事のほか、世界医学氣功学会・世界氣功学会の理事でもある。

1946年、劉先生はあるきっかけで廈門万石岩寺の峴禪法師に弟子入りを許された。峴禪法師は少林寺の正当な出家僧侶であり、少林寺秘伝の一指禪の継承者であった。なお、書・画・武道にも精通している。従来、一指禪は少林寺で重宝されて、戒律によって、同派の正当な出家僧侶以外に伝わらない、という門外不出の秘伝であった。劉先生は、峴禪法師が戒律を破って伝えた一指禪の初の在家弟子であり、またその唯一の継承者でもあった。

峴禪法師は一指禪の氣功点穴療法で患者を救い、多くの奇跡ともいえる治療効果をあげた。なお、法師はお金を一切とらず、貧乏人にいつも薬を与えている。これは一指禪の一つの伝統として、劉先生を通して現在までも引き継がれている。1948年、法師は弘法のために海を渡って南下し、104歳の時にシンガポールで円寂した。同年、すでに若い革命者になった劉先生は、旧中国当局の処刑から逃げるために香港に避難した。1951年には大陸に戻って当時の広東医科専門大学に入学して内科を専攻し、1956年卒業後、廈門の病院に勤めた。夫人の郭秀蘭女史も中国第四軍医大学の出身で、夫婦とも医者である。数十年來、劉先生は指1本で、国内外の各地からの患者の疾患を取り除き、1日の患者数は、100人を越えることが常である。

1964年、劉先生は『一指禪氣功点穴療法』（上巻：一指禪氣功、下巻：位置指禪点穴療法）および『古今医学名著解題』という二部の書稿を完成したが、まもなく文化大革命の嵐が起きて、劉先生は医学権威として打倒され、酷い迫害を受けて、すべての書稿が焼かれた。のち文化大革命の終結にともない、中国では氣功の新たな春を迎えた。1981年、中国全国氣功科学研究学会および第1回學術シンポジウムが開かれ、同大会で、劉先生は一指禪点穴療法で頸椎病を治療する論文を発表し、また当時あまり知られていなかった「氣功外氣」の遠隔発射を実演した。これは、その後の中国における外氣研究のブームを引き起こすきっかけの一つとなった。そして1980～90年代には劉先生の名は国内外で広く知られるようになった。

2. 一指禪氣功と一指禪点穴療法

中国で「一指禪」の名で広く知られている氣功は、源流の異なった三つの流派がある。その一つは、海灯法師（中国の高名な氣功師巖新の師）の内勁一指禪であり、硬氣功の一種でもある。そして次に、南少林寺が発源地として、のちに上海を中心に広げられた南少林寺一指禪である（中国の少林寺は、大別して北少林寺と南少林寺という二大流派がある。北は河南省の嵩山少林寺を代表として、これに対し南は福建省泉州の少林寺を代表としているといわれている）。上の二つの一指禪の訓練体系と技術風格とは異なり劉先生が受け継いでいる一指禪は、北少林寺の一指禪である。これは、ダルマ大師が嵩山少林寺で授けたものと伝えられている。ダルマ一指禪は、剛・柔の二つの方法があり、いずれも指先の「功夫」（中国氣功・武術の実力のこと）である。剛法とは、指先に気を運び、点穴の手法で敵の経穴を攻撃し、その氣血の流れを閉ざして知覚を失わせる方法であり、少林寺拳法の真髓である。柔法は丹田の気を指先に運び、人体の経穴に点穴し、その氣血を流通させて病気を癒す仁術である。

従来、一指禪は師弟の間で口から伝授して文字を残さない（不立文字）功法であるが、劉先生により初めて文字として整理された。劉先生が伝えた一指禪は、一指禪の氣功法、および一指禪の点穴療法という二つの部分で構成されている。前者は内氣と外氣の実力を養うための練習で、後者は一指禪氣功による病氣治療の具体的応用である。両者は表裏一体のものとなる。

一指禪氣功法は、主に以下の三つの功法からできている。

1) 座禪（坐功）。これは、一指禪功法の根本である。ただし、世の中に知られている「座禪」とは違い、一指禪の座禪は、内氣を養い、元神（氣功のいう本体意識・先天意識のこと）を清めるための高度な静功である。なお、通常的气功の静座と比べれば、一指禪功法の丹田の概念は独特である。

2) 立禪（站功）。一指禪は、病氣の治療に応用できる外氣の発射に最も優れた医療氣功であり、立禪は、こうした外氣発射の能力を養うための最も重要な基本練習である。

3) 行禪 (行歩功)。これは八卦の方角に従って歩きながら、両手が太極の円を描くような形で行われる。「足踏八卦」「手抱太極」。この練習により、内気は丹田から螺旋のように回転しながら、手の平・指先に運ばれて、さらに体外へとレーザのように集中的に発射する能力を身につけることができる。

一指禪の点穴療法は、弁証・論治・処方・取穴・手法・運氣など体系化した治療方法である。

次に、一指禪点穴療法の手法の操作の中心となる「点穴五法」および施術者が外気を発射して患者の体内に注ぐ「運氣三法」を簡単に紹介する。「点穴五法」とは、以下のような五つの手法を指している。

- 1) 点——人差指先をつぼに軽くつけること、補に属す。
- 2) 按——人差指先でつぼをやや強く押すこと、平補平瀉に属す。
- 3) 压——人差指先でつぼを力強く押すこと、瀉に属す。
- 4) 点運法——人差指先をつぼにつけて、ただちに気を運んで患者の体内に急速に注ぐこと、瀉に属す。
- 5) 懸点法——人差指先をいったん患者のつぼを押してから、つぼから離れて体表を触れずに点穴を行うこと。

「運氣三法」とは、次のような三つの外気発射の方法である。

- 1) 按運法——人差指先を用いて患者のつぼに「点」の手法で軽くつけて丹田から内気を引き出し、外気を発射して緩やかなスピードで患者の体内に注ぎ入れる方法。補に属す。
- 2) 压運法——人差指先で患者のつぼを「压」の手法で強く押しながら、速くもなければ遅くもないスピードで外気を患者の体内に注ぎ入れる方法。平補平瀉に属す。
- 3) 懸空運氣点穴法——人差指先で患者のつぼを押してから、ただちにつぼから離れて、体表を触れずに、遠隔の距離で外気を患者のつぼに持続的に注ぎ入れる方法。

通常、気功の外気療法やそのほかの手技・鍼灸療法、ないしは心理療法の経験者にとって、治療にともなった施術者自身の生体エネルギーと心エネルギーの消耗、および患者側から流れてきた病いの気などの不良な生命情報による施術者の健康に対する影響は、常に対応に苦慮する悩みとして存在している。そのうち、体調が廃れて廃業せざるを得ないケースも時々耳に入っている。しかし、一指禪点穴療法の最大の特徴の一つは、医療用の外気の発射にあるにもかかわらず、その恐れがまったく見られなかった。というのは、現在、中国で広げた気功法のほとんどが健康のための養生気功であるのに対し、一指禪は、もともと、医療気功としてセッティングされた功法である。著者自身の経験で言えば、中国に里帰りしたさいに、劉先生が教えた方法で毎日何十人も患者に施術したことがあった。その場合、施術した人数が増えるほど自らの体調がよくなって、外気も強くなる、つまり、施術そのものが気功の練習になるのである。

3. 一指禪点穴療法の応用

一指禪点穴療法は、内・外諸科のほとんどの病気の治療に適用する。劉先主は長い医療生涯の中で、たびたび奇跡を起こして、数多くのエピソードを残している。以下、一指禪点穴療法の実際応用を理解するために、劉先主が治療した症例の一つを掲げることにする。

黄**／男/60歳/1974年7月初診 症状 脳卒中による半身不随、ロや眼が歪む、右側の手足を動かすことができなくなり、寝たきりで寝返りすることさえできず、なおかつ言語障害を起こして話すことができなくなった。3か目の入院治療を受けたが効果が見られなかった。

治則 本病は脳卒中による半身不随であり、肝陽上亢に属す。百合を主穴として、瀉法を中心に外気を応用すべし。

取穴治療 下肢：先に安土穴（本家穴[一指禪独特のっぼのこと]、小腿の内側、承山穴の横、指2本開きのところ）で点圧、脾経の気を通させる。次に足三里および解谿を取り、「点」を行い、胃経の気を調節して、下肢の麻痺を治し、さらに冲上穴（本家穴・太衝穴の上半寸のところ）を取り、懸空運気点穴を行い、肝気を瀉する。 上肢：内関・外関を取り、透点（一指禪の独特の手法、外気で内関穴・外関穴を突き抜ける）を行い、心気を整えて神志（精禪・意識）を回復させ、さらに、肩井・曲池の点穴と合わせて、上肢の麻痺を取り除く。そして、少商穴を点圧して、肺気を上昇させ、会身の気機を強めさせる。

胴体：神闕を取り、懸空運気点穴を行い会全身散乱の気を元に引き返し、丹田の元気を強める。次臍中を取り、「点」を行い、胸の苦しみを取り除いて宗気を整え、「痰」を溶かす（東洋医学では、神志の混迷は痰が詰まって心気を遮断したことによる、という説がある）。

頭部会百会を取り、懸空運気点穴を行う。通常、任脈と督脈の交点は、舌先と歯茎にあるとされているが、一指禪気功の場合、百会は任脈と督脈の交点であり、会身の経穴を統率していると見なしている。故に、百会に外気の施術を行うことは、以上の諸穴の施術の総まとめとなる。

効果 上の諸穴に5分間の施術を経過すると、患者はただちに自力でベッドからおりてトイレに行った。その後、週1回のペースでさらに2回の治療を行い、患者の自己生活管理の能力が基本的に回復して退院した。退院後、リハビリのためさらに3か月の治療を受けて完治した。

注：

いわゆる気功「外気」は通常、人体が意識のコントロールによって体外へ発射した生体エネルギーと理解されている。中国では、外気に関して影響力を持つ定義の一つは次のようである。「外気とは、気功の達人が気功状態において、体外へ遠距離で発射した方向性のある客観的効果」。

（筆者は、中国厦門大学卒業後、華僑大学専任講師を経て来日留学、東京人学文学博士号取得。現在、同大学東洋文化研究所でアジア文化に関する研究に従事している。同時に、日本無為気功養生会指導委員長として、東京、横浜などで気功・武術・太極拳などの東洋伝統的健

康文化の普及活動を行い、また劉先生の内弟子として、
中国厦門一指禪氣功研究学会副理事長を務めている。氣
功に関する上梓および論文多数を発表している)日本無為氣功養生会指導委員長として、東
京、横浜などで氣功・武術・太極拳などの東洋伝統的健
康文化の普及活動を行い、また劉先生の内弟子として、
中国厦門一指禪氣功研究学会副理事長を務めている。氣
功に関する上梓および論文多数を発表している)、東
京、横浜などで氣功・武術・太極拳などの東洋伝統的健康文化の普及活動を行い、また劉先
生の内弟子として、中国厦門一指禪氣功研究学会副理事長を務めている。氣功に関する上梓
および論文多数を発表している)